



# 田中家石村

tanakaya-communication

## 田中家通信

発行/田中家石村  
彦根市高宮町108-1 TEL.0749-24-2789

VOL.8

### お月見



お月見は旧暦の八月十五日に月を鑑賞する行事で、この日の月は「中秋の名月」、「十五夜」、「芋名月」と呼ばれます。

月見の日には、おだんごやお餅(中国では月餅)、ススキ、サトイモなどをお供えして月を眺めます。

月見行事のルーツはよくわかっていません。

中国各地では月見の日にサトイモを食へることから、もともとはサトイモの収穫祭であったという説が有力となっています。その後、中国で宮廷行事としても行われるようになり、それが日本に入ったのは奈良く平安時代頃です。

また、日本では八月十五日だけでなく九月十三日にも月見をする風習があり、こちらは「十三夜」、「後の月」、「栗名月」とも呼ばれています。

十三夜には、月見団子の他に栗や枝豆をお供えします。各地には「十五夜をしたなら、必ず十三夜もしなければいけない」という言葉が伝えられており、片方だけの月見を嫌う風習があったようです。

十三夜の風習は中国にはなく、日本独自のものです。

年	中秋の名月 (旧八月十五日)	後の月 (旧九月十三日)
2006年	10月6日	11月3日
2007年	9月25日	10月23日
2008年	9月14日	10月11日
2009年	10月3日	10月30日

### 七五三



七五三(しちごさん)とは、男の子は三歳と五歳、女の子は三歳と七歳の年の十一月十五日に、成長を祝って神社・氏神などに詣でる行事のこと。本来は数え年だが、現在は満年齢で行われることもある。

七五三のお祝いは、もとは江戸時代の武家社会において、幼い子供達が少年・少女として社会に迎えられていくという意味で、子供の成長の節目にあたって行われていました。

男児女兒は共に三歳になると七五三の最初の儀式である「髪置き(かみおき)」を行ないます。

昔は、赤ちゃんの頃から三歳頃までは頭髪を刈るのが一般的でしたが、これはこの歳を機に初めて髪を伸ばして結い整える儀式で、赤ちゃんから幼児へ成長した事を祝うものでした。

続いて男児の五歳は「袴儀(はかまぎ)」を行ないます。これは五歳になった男児が始めて袴を着用し、幼児から子供へと成長した事を祝う儀式です。これに対して女兒七歳は「帯解(おびとぎ)」の儀式を行ないます。

これはそれまで着けていたつけ帯を解き、初めて本式の大人の着ける幅広の帯を締める儀式です。現在でも着用されている七五三の衣装は本来このような意味があるものなのです。



### 賞えておきたい

#### 語源・由来

#### 「蓮花生(いちれんたくしやう)」

良くも悪くも同じ運命をたどること、一緒に行動すること。追い詰められて、運を天にまかせるような場面で使うことが多い。

仏像が蓮華をかたどった台座に置かれている。これは泥中にありながら美しい花を咲かせる蓮を、煩惱のなかからさとりの花を咲かせる、仏教の心に通じるものがあるからだという。

本来は、来世も一緒にと願うものたちの祈りからきた言葉。極楽浄土では、誰もが蓮華の上に生まれ変わるという。

来世こそ同じ蓮華の上に生まれて結ばれたいと願って、心中した恋人たちの哀れな夢でもあった。

#### 「おあいそ」

おあいそとは、飲食店でのお勘定や勘定書。「おあいそう」とも。

おあいそは、本来、お店側が「お愛想がなくて申し訳ありません」などと断りを言いながら、お客に勘定書を示していた言葉である。

語源のままであれば、お客が「おあいそして」と言うと、「こんな店には愛想が尽きたから清算してくれ」という意味になる。

#### 「急がば回れ」

急がば回れとは、急ぐときには危険な近道より、遠くても安全な本道を通るほうが結局早い。安全で着実な方法を取れという戒め。

急がば回れの語源は、宗長(室町時代の連歌師)の歌「もののふの矢橋の船は速けれど急がば回れ瀬田の長橋」である。

「もののふ」とは武士、「やばせの舟」とは矢橋の渡しを意味する。



「矢橋の渡し」とは、東海道五十三次草津宿(滋賀県草津市矢橋港)と大津宿(大津市石場港)を結んだ湖上水運で、「瀬田の長橋」とは、日本三大名橋のひとつ「瀬田の唐橋」である。

当時、京都へ向かうには、矢橋から琵琶湖を横断する海路の方が、瀬田の唐橋経由の陸路よりも近くて速いのだが、比叡山から吹き下ろされる突風(比叡おろし)により危険な航路だったため、このような歌が歌われた。



### 近江商人と祖先崇拜

近江商人の活発な経営活動を支えていた精神的バックボーンは何かというと、それは神仏を敬い祖先崇拜にうらうちされた宗教的儒教道徳であった。その中で特に、「勤勉」、「始末(儉約)」、「正直」、「堅実」の四点だと指摘されている。

「勤勉」は、この世に生まれてきた以上、勤勉に働くことにより社会に奉仕することであり、その報酬として収入を得て家を豊かにすることが、結果的に祖先や社会に対して報恩感謝奉仕の行となることであった。

「始末(儉約)」は、他の中の人々のおかげで物を手に入れ、感謝して大切に使用していただき、お金も始末して、合理的に儉約することによって蓄財を果たし、それを子孫に継承させれば、家の安泰を図ることができる。これによって、モノに感謝する気持がモノを大切にすることを生んだ。

「正直」は、人をだましたり、人の弱身につけ込んでアコギな商法をしたら、けっして神仏は許してくれないだろうと考えた。

「堅実」は、堅く強く商売していれば、家が傾くこともないし、ましてや破産することもない。そうすれば信用を得て無形の財産となる。

こうした考えが精神的支柱となっていた過程の一部に、祖先崇拜が大きな助けになっていました。

